

オニシン

バン格拉デシュ派遣ワーカー
岩本直美（看護師）

オニシンは24才になる純粋無垢な青年だ。彼と話をするとその素直さに心打たれる。脳性麻痺のため移動には車椅子を利用し、食事やトイレには介助が必要だ。JOYJOY プロジェクトは子どもを優先して受け入れているが、オニシンの自宅はJOYJOYプロジェクトのあるスイハリ小教区の裏手にあり、週末には家庭訪問をして機能訓練を続けてきた。

ここ1年ほど彼と彼の両親は「オニシンの結婚」について揺さぶられてきた。バン格拉デシュでは裕福な家庭の障がいのある男性が、貧しい家庭の若い女性と結婚することはよくある。オニシンの父親は民間団体職員で、母親はJOYJOYプロジェクトの近場にある役所に勤めている。大学生の弟が1人。父親は以前からオニシンの将来のために必ず結婚させると話していたが、それが具体的な話となった。母親は、JOYJOYプロジェクトの母親の会世話役代表としての、普段のキリッとした表情はなく、泣きそうに言う。



オニシン(前列左)とバドン(右)、オニシンの母親(後列)

「その人はね、ぜひ娘をあんたの息子と結婚させたいって言うのよ。貧乏な家だから16歳の娘を家においといたら村の者からいつ何をされるかわからない。それよりも早く嫁に出した方が安心だって言うのよ。でもね、わかんないでしょ、いつどうなるか？ 私たちがいる間はいいいよ。でも親が死んだらオニシンを世話してくれないかもしれないでしょ？ オニシンはもう結婚のことで頭が一杯よ。その娘と結婚させてくれないなら飯は食べない、

水浴びもしないって。だから見てのとおり髭も伸び放題よ」

オニシンの母親の言葉を、女性の立場や権利を無視したひどい話だと言うのは簡単だ。しかし障がい者支援に関する社会保障や制度がほとんどないこの国では、親たちは自分たちが死んだ後に障がいのある我が子がどうやって生き延びられるか、その方法を自分たちで探すしかないのだ。兄弟姉妹はあてにならないと親たちは言う。

ここ数カ月、私はオニシンがJOYJOYプロジェクトのためにできることを模索してきた。そして母親を交え本人と話し合った結果、デイケアの受付係をすることになった。「自分は大人だから、子どものいるJOYJOYプロジェクトには行かない」と言っていたオニシンも、仕事となれば別だ。彼の役割はスタッフが子どもたちと一緒に室内で過ごしている間に、来訪者があればブザーを押して知らせるというものだ。しかし彼の震える右手で押せるブザーの実用化に至るには試行錯誤が続いた。現在使用しているのは電池式の玄関ベルである。何とか使いこなせており、スタッフたちも彼の仕事ぶりに満足だ。

JOYJOYプロジェクトの子どもたちはオニシンの存在に興味津々で、ラキブは親愛の情を込めて彼の頭をパンパン叩く。世話好きのバドンは彼に水筒の水を飲ませたくてストローを彼の口に突っ込み、同時にブザーを勝手に押してはスタッフに追いかけている。でもオニシンは「バドンは俺の友達だ」と言う。彼がJOYJOYプロジェクトで結婚について騒ぐことはない。彼が求めているのは仲間であり、誰かとの繋がりなのだと思う。

JOYJOYプロジェクトは子どもたちを主に受け入れているが、家にこもっている障がいのある青年男女たちには、JOYJOYプロジェクトを支援するために何かの役割を担ってほしいと考えている。探し求めれば必ずその人ができることがあると思う。何よりその人の存在そのものから、他者が得る深い喜びがある。